

鹿の骨のガラスを探して——福井ツアー報告

7月31日、当機構主催による福井県への視察ツアーを実施しました。目的は鹿の骨を使ったガラス製品を制作している「ガラス工房 KEiS 庵」です。「OBAMA blue」と呼ばれる青いガラスで知られる工房が、鹿の骨を使うようになった理由は何か。そしてそれはどんなガラスなのか。庵主・竹田恵子さんを訪問してきました。



■ツアーのきっかけ

きっかけは今年2月、問い合わせに飛び込んできた一通のメールでした。KEiS 庵からのそのメールには、小浜市の海の砂、牡蠣の殻、サバの骨を溶かした「OBAMA blue」と名付けたガラス製品のこと、その研究の途中で、シカの骨のガラス化に成功したことが綴られていたのです。

鹿の骨を使った陶磁器は知っていたもののガラスの作例は初めてのこと。メールでは、コンタクトを希望されており、機構からも即ご連絡。小浜市のガラス作家・竹田さんとの情報交換が始まると、その後トントン拍子で話が進み、6月の関西・大阪万博の折に開催された「関西ジビエウィーク 2025」の会場では、鹿ガラスの展示販売もさせていただきました。

会場での反応も良く、また、国産ジビエ認証取得施設の皆さま

まからも問い合わせのご連絡をいただくなどの反響があったことから、皆さまと一緒に KEiS 庵へお邪魔し、現地でお話を伺おうということになり、ツアー開催の運びとなったのです。

■嶺南地域有害鳥獣処理施設・加工施設の見学

KEiS 庵が鹿の骨を仕入れているのは、若狭町にある「嶺南地域有害鳥獣処理施設・加工施設」です。7月31日のツアーは、こちらの施設の見学からスタートしました。国産ジビエ認証施設からは、タバジビエ（山梨県）の保坂幸徳さん、地美恵の郷みまさか（岡山県）の濱田恭徳さん、糸島ジビエ工房（福岡県）の相内啓靖さんが参加。また、当機構とは旧知の仲であった狩女の会の福岡富士子さん（石川県）、師田幸子さん（富山県）、米田順子さん（石川県）もジョインしてくれました。



施設全体外観。右側が焼却施設、左の茶色の建物が加工施設



若狭町農林水産課 主査 岩崎誠さん



焼却施設の搬入口

施設側でご応対いただいたのは若狭町農林水産課の皆さまです。本施設は福井県嶺南地域の2市4町(敦賀市、小浜市、美浜町、若狭町、おおい町、高浜町)で建設・運営されています。「焼却施設は平成24年に建設されて、ピークでは年間9000頭、近年は6000～7000頭を受け入れています。近くの市町からはハンターさんが直接持ち込みますが、離れた市町には、回収車が巡回しています。1回につき30～50頭くらい、重量にすると1～1.2トンほどになりますが、これを週に3回燃焼しています」(若狭町農林水産課 主査 岩崎誠さん)

地域の夢源建築(有)が指定管理を請け負っており、スタッフが常勤し、ほぼ毎日受け入れをしているそうです。



(写真上) 焼却炉の外観、(写真下) 燃え残った骨



ヌートリアを持つ濱田さん(地美恵の郷みまさか)

「焼却は朝7時に着火して、5～6時間ほど。さますのに3時間ほどかかりますので、ほぼ1日かかります」(施設責任者 西山さん)

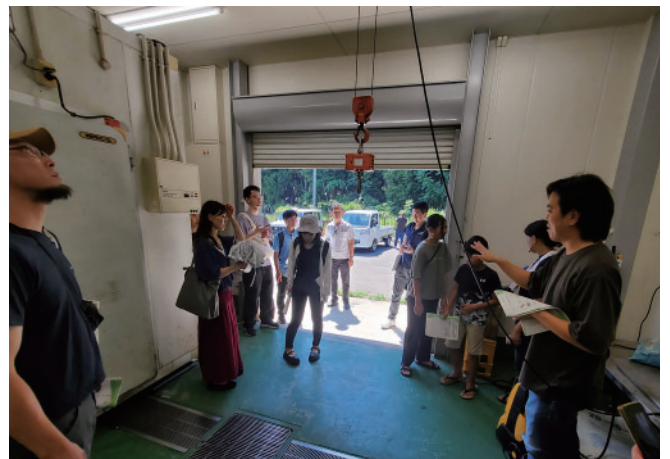
二次燃焼をさせる焼却方法のため、煙などが出ることもなく環境負荷も低い仕様です。また、焼却後には骨が一山残るだけ。1回でおよそ50kgの焼却灰が残り、年間で約8～9トン、フレコンバックで15袋ほどが産業廃棄物として処理されています。

捕獲者は地域の有害鳥獣捕獲隊などが担っているそうです。例えば若狭町では捕獲隊員が9名、罠設置のみ対応は35名。捕獲、止め刺しなどの作業によって報奨金が細かく設定されているのが特徴的です。ただ、伺うと他の地域同様、捕獲者の減少はやはり課題となっているそうです。嶺南地域から運び込まれている獣種はさまざま、鹿、イノシシが中心ですが、ニホンザル、ヌートリア、ハクビシンなども混じります。

参加した国産ジビエ認証施設の皆さんは、施設の運営体制、猟師さんの持ち込み体制やコストにも興味津々な様子で、見学途中から熱心に質問していました。この辺はさすが同じ施設運営者で、かなり専門的な議論を交わしていました。

■若狭ジビエ工房は大忙し

併設の食肉処理加工施設「若狭ジビエ工房」は、焼却施設に遅れること1年、平成25年に稼働を開始しています。



一次処理室



若狭ジビエ工房 西村さん

「持ち込みは基本的に若狭町からのみです。一次処理室、熟成室、二次処理室という構成になっており、二次処理では食用のほかペットフードの製造もしています。年間260頭ほど処理しており、基本的にはほぼ1人で回しています」

と説明してくれるのは、施設責任者の西村拓也さん。二次処理室にはプロセッサーやミンサー、レトルト用の圧力釜、スチームコンベクションなどの加工機器も揃っており、さまざまな商品を製造しているとのこと。加工ではペットフードの需要が高く、OEMで多くの会社の製品を製造しているそうです。食用は、基本的に個別販売はしておらず、道の駅への卸、ふるさと納税への出品のみとなっています。

ここでも国産ジビエ認証施設の皆さんからの運営などについての質問が相次ぎ、また、お互いの仕事につながるような意見交換も行われ、先々にも期待ができそうでした。

■ KEiS 庵へ

施設見学を終えていよいよ KEiS 庵へ。背後に山を控え、眼前には若狭湾が広がる立地で、ゆったりとした雰囲気です。



KEiS 庵 竹田恵子さん

KEiS 庵は、庵主である竹田恵子さんと、そのお姉さんの美恵子さん、お母さんの恵津子さんの3人で営まれています。恵子さんは3年間の沖縄での琉球ガラスの修行を経て、2008年に庵を結び（工房を設置）し、創作活動を開始。2019年から地域の原料を使用したガラス制作の研究を始め、2022年に若狭の海をカタチにしたような、「OBAMA blue」の開発に成功。話題を呼びました。

「きっかけは、若狭牡蠣の殻がいたるところに積まれ、回収車が来るまでそのままになっていたこと。見た目も良くないし、匂いも気になったので、これでなにかできないかなと思いました」

ガラスは、簡単に言ってしまうと砂と石灰を高温で混ぜて作られています。そこで恵子さんは、砂を小浜の砂浜から、石灰は牡蠣殻を使い、さらに酒粕を餌に育てられる小浜名産の「小浜よっぱらいサバ」の骨も使用してガラスを作ろうと思いつきました。

「ガラスの色や質が、同じ小浜市でも砂浜によって変わるし、ひとつの砂浜でも場所によって変わる。さらにいえば、季節によっても変わるんです。だから、この季節のこの砂浜のこの場所の砂、というのを探し当てるのに苦労しました」

ガラスの色は、そこに含まれる微量の金属によって決まら

ます。海のような OBAMA blue は、そんな3年に渡る研究の結果生み出されたものだったのです。

そして、鹿の骨を使うのも、その過程で取り組まれたものでした。

「海のものを使うと透き通ることが分かったんですけど、じゃあ、山のものを使ったらどうなんだろう？と。最初は鳥の骨から始めて、イノシシや他のものの骨もいろいろ試していました。最終的に鹿を選んだのは、海士坂の施設（嶺南地域有害鳥獣処理施設・加工施設のこと）で一番多いのが鹿だったから。鹿の



工房の説明をする恵子さん

骨を使って、きれいなものが作れればと思ったんです」

OBAMA blue は若狭の海を思わせる滑らかな青。鹿の骨を加えると、そこに白濁が加わり、緑を帯びた色に変化します。「(ガラスを溶かす) るつぽの場所によっても色が若干変わり、まだまだ研究途中ではあるのですが、今日、このガラスの呼び方を『漉青』(ろくしょう) と決めました」

銅がふく青緑のサビを「緑青(ろくしょう)」と呼びますが、そこに掛けてのネーミングです。鹿の骨を混ぜると、白濁が入るほか、普通のガラスよりも粘度が下がるという特徴もあるそうで、どんな作風作品が似合うのか、さらに研究を重ねていくとのこと。

恵子さんの説明を聞いた後、工房や展示販売されている作品

などを見学させていただきました。工房での作業は、炉が1200～1400度の温度になることから、「作業をしているとシャワーを浴びたような汗をかく」そうで、ガラス制作の作業は、基本的に夏にはできず、12～6月の期間のみとのこと。壁には工房を開いたときの思いを綴った恵子さんの思いが大書されており、それ自体がひとつの作品になっています。

食肉以外の副産物を利用した取り組みは、残渣軽減に寄与するだけでなく、背景のストーリーも相まって、シンボリックで魅力的なアイテムになります。また、その他の副産物との掛け合わせで、さらに魅力的になる相乗効果も期待できます。例えば、鹿ガラスなら鹿革と組み合わせたアクセサリー。KEiS 庵の恵子さんは、すでに市内の草作家の森下繁さんとコラボし、さまざまな作品を作っています。今回参加した国産ジビエ認証施設の皆さんも、「鹿ガラスをイベントで使わせてもらいたい」「地域のクラフトマン、作家に伝えてヒントにしてもらいたい」と話していました。当機構でも、今後さらに鹿青ガラスとのコラボを検討していきたいと考えています。

今回のツアーは、単に「福井県の施設を見学した」「工房を視察した」以上の成果があったように思います。

ひとつは、多様なメンバーが参加していたために、さまざまな視点・論点で視察できたこと。認証施設の皆さんそれぞれの視点から質問をしたり、意見を述べていたりしたことが、視察の奥行きを広げてくれ、深い学びにつながったと言えます。これは嶺南地域有害鳥獣処理施設・加工施設、KEiS 庵の双方で



(写真上左) 手前が鹿ガラスによる風鈴。奥側が「OBAMA blue」。(写真右、左下の左側) 鹿ガラスの白濁と厚みが、海の波のような濃淡を生み出す。(写真左下の右側) 「OBAMA blue」のガラス

のことでした。

次に、作家・アーティストとの交流ができたこと。各認証施設では、近隣のアーティストさんに皮革や角、骨の提供をし、作品を作るという取り組みはすでにされているかと思いますが、今回はガラス作家だけでなく、恵子さんと活動を共にしているレザー作家、ワイヤーアート作家のお二人も参加してくれ、この点でも深い学びを得ることができました。

そして、認証施設の皆さんとの交流を深められたことも大きな成果です。当機構の事務局メンバーが研修や審査の折に個別に交流することはありましたが、このように複数の施設の皆さんが集まり、事務局だけでなく、施設の皆さん同士での交流が深まったことが、何よりも大きな成果だったと思われます。

今挙げた成果は、いますぐ何かに役立つというものではないかもしれませんが、今後、ジビエ振興を進めていくうえでの土台になってくれるに違いありません。これからもこうした視察や交流の機会を設け、ジビエ振興をさらに加速させていきたいと思います。



記念撮影は能登の復興を祈念する「能登マーク」（親指を立てて少し曲げると、ジビエの「J」で

